

■安積中学校■安積高等学校在京同窓生

東京桑野会会報

●昭和58年4月1日発行●発行人・壁谷裕之●編集人・石川照雄●発行所・東京桑野会事務局=東京都中央区銀座8-15-15銀座原ビル6階武蔵一級法律事務所内●デザイン・制作・桐東京クリエイティブセンター●

東京桑野会定期総会

開催のお知らせ



下記により恒例の東京桑野会定期総会を開催いたします。ご多用中とは存じますが、万障お繰り合わせの上ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

- 期日 昭和58年4月15日◎
- 時間 午後5時—受付開始
午後6時—総会
午後6時半—懇親会
- 議案 ①役員改正
②会則改正
③その他
- 場所 椿山荘
東京都文京区関口2-10-8
でんわ：03-943-1111
(国電目白駅、地下鉄有楽町線江戸川橋駅下車)

- 会費 懇親会費 6,000円
58年度年会費 1,000円
(総会に欠席の方は、年会費を同封の別紙振込用紙にてお振り込み下さい。)

■尚、準備の都合もありますので、ご出欠のお返事を同封の葉書で、折り返し3月末日までにご返送下さいますようお願いいたします。

■会場の手配は、55期の竹花則栄氏のお骨折りをいただき、過分のサービスが予想されます。ご期待下さい。

■56年度は104名、57年度は97名のご出席をいただき、会場は和気あいあいの雰囲気でした。58年度は旧年を上回る出席をお願いいたします。

(事務局)

●事務局から●

■東京桑野会会報の第2号を、お手許におとどけいたします。スタッフ一同本職の合間に仕上げたものですからなにかと不満の点もありますが、熱意ある奉仕に免じてお許し下さい。

■トツゼン原稿ご執筆の依頼を、主としてスタッフと幹事諸氏にお願いしました。しかも原稿料なし、さらに締切余裕なし……。心よくお書き下さった諸氏に誌上をおかりして深く感謝いたします。紙面と締切りの都合で割愛させていただいた原稿は次回に利用させていただきます。併せてご承知下さい。

■次回第3号の原稿もお願いいたしますが、有志諸氏とどしどし書き送っていただければ編集人として嬉しいことです。条件は下記の通りです。

- ①タイトルは12文字以内。
- ②文章はヨコガキで17字詰、33行。
又は17字詰、72行。のいずれか。
- ③卒業期、現職も併せて記載。
- ④締切日、58年4月末日。(厳守)

■広告掲載および広告紹介斡旋にご協力下さった方、誠にありがとうございます。会報は広告費収入によって出来るものです。ご奉仕に感謝しております。併せて他の同窓生諸氏にも強力な協力をお願いしたいのです。

●ひとわく 30,000円



昭和57年度東京桑野会総会

わが日々好会

55期 結城 光

昭和17年6月のミッドウェイ海戦を頂点として、太平洋戦争が坂を転がるように悪化の一路を辿りつつあった戦局の最中、昭和18年3月、私達第55期生は安積の学窓を後に、進学、或は就職にと夫々の人生に向かって散っていった。然しながら、私達の青春は、動員に徴用に、そして訓練にと明け暮れ、不運にも一部の者は戦争末期に召集され、或は戦死、或はシベリヤに抑留されて悲惨な経験を余儀なくされたのであった。

そして敗戦という余りにも大きい動揺期に遭遇した私達は、再び人生を一からやり直すために夫々苦難の路を歩み始めたのである。このような激動の時期に生をうけた私達の間、一種の強い連帯意識が醸成されていったのも当然であったであろう。

また戦後は終らぬながらも、朝鮮戦争後の景気で、漸く落ちつきを取り戻しつつあった昭和29年7月某日、有志の献身的努力によって、在京期友の消息が次第に判明し、東京駅を集合場所とした第1回の会合が持たれたのであった。

自今、毎年の行事とすることが決定されて、翌30年は12月に、二本松にご健在であったわれらが学年主任、斎藤矯先生を椿山荘にお招きして第2回目の会合を持ったのである。

この意義ある会合の命名を先生にお願いしたところ、この難関を乗り切るには、毎日毎日にある希望を持つ生活あるのみと考えられて、禅語の『日々

是好日』から『日々好会』と名づけられた。東京という異郷にある故であるが、腕白時代を一緒に過した旧友が無性に懐しく、毎年の会合は益々盛会となって、今日まで連帯の輪を広げてきたのである。毎年必ずご夫妻で上京された斎藤先生も、昭和42年11月13日、遂に永眠された。

私達は恩師のご遺志を継いで、日々好会の灯を絶やさぬように続けていきたいと希うものである。

郡山にはその後、第55期会の本部が設けられ、毎年11月に総会が開催されることになった。総会には必ず東京方面からも多数出席して交流を深めている。そして、期会発生の源泉となった日々好会は、今や期会の東京支部であるとともに、在京期友の心の憩いの場として、毎月の会合を楽しみ、淡々たる交遊を続けている次第である。

桑野寮再建を

48期 長谷川 輝

戦前「お定事件」という明るい話題を賑わして有名になった新井薬師様となり、安積の第2寄宿舎と名づけられた桑野寮がありました。この寮に直接私は居住しませんでした。一年上の熊田正郎先輩(比島で戦死)が居られましたので「参考書」を借りによく訪ねました。中野駅までの帰途に「ピカー」というおでん屋で、酒徳利の持ち方から教えを受けました。今日まで呑ん平の看板を掲げて来れたのも当時の特訓のおかげでしょう。

戦時中、軍令部勤務のため在京したので寮の近くを通った折、一階の広間で、年老いたおばさんが寮生の靴下の

繕う手を止めて、当時手に入らない「塩せんべい」でお茶を入れて下さったのを今でも忘れることが出来ません。

約10年ほど前、飛鳥建設の役員室で三菱銀行から出向の古川清一(43期卒)先輩から「早く桑野寮の再建をしたいものだ」と伺ったことがあります。一入です。名門の安田善五郎(17期卒)大先輩は、昭和4年4月に「積善寮」を牛込に設立して、育英事業をされたのは別格と及ぶべくもありません。将来の構想に入れることにして、宿泊施設の寮だけは実現したいものです。

百周年記念行事として取り上げる様提案します。具体的には用地入手難、高建築費、財源と種々困難が予想されますが、安積魂の総力を結集して実現しようではありませんか。

58年4月の総会には、長い間会のために御苦労いただいた壁谷会長が辞任を表明しておられますので、新会長の御指導のもとに強力に推し進めようではありませんか。

青春の記念

安積高校卒業 記念サイン帖

64期・高3期 石川照雄

昭和〇年3月28日福島県若松市千石町〇〇で出生父届出。

私の戸籍抄本の1行目にはこう記してある。

父が地方公務員で、福島県庁管轄区域内を転勤移動していた関係で、若松市で生まれてすぐ福島市に移り住んだ。

透明な音が駆けぬける—高純度銅オーディオケーブル

導体中の不純物は、オーディオ信号に歪みを引き起こす原因のひとつと考えられています。日立OFC(Oxygen Free Copper=無酸素銅)ケーブルは、この酸素や他の金属不純物を追放した99.99%以上の高純度銅を使用。通常使われているタフピッチ銅(T.P.C)と比べると約1/100の酸素含有量です。デジタルオーディオ時代に求められているハイクオリティな素材として、幅広いニーズに見事に応えるオーディオケーブルです。

日立OFCオーディオケーブル

日立電線株式会社

東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)
〒100 ☎東京(03)216-1611(大代表)

だから若松市での幼児期の思い出はあまりない。しかし履歴には「福島県若松市出生」と書くことになっているのでなんとなく面映い気もする。

小学校は福島第一尋常高等小学校で5年生まで在籍した。

当時の住まいは弁天山の麓、渡利村であったため、阿武隈川の土手を歩き、松齡橋を渡り、春には桜、秋には紅葉の美しかった県庁の横を通って登校したり、青野先生という美しい女教師や、オオギダ君とかアヤコちゃんとか、キミ子ちゃんと遊んだ記憶が、わずかながら残っている。

小学校の6年生から郡山市の第3小学校（のちの橋国民学校）に転校した。

敗戦間近い時代の、いたしかたのない汚れた木造2階建ての寒々とした校舎と、やけに立派な、空襲火災の防火用として貯水されたプールのある学校に、6年3組男子81名の1人として1年間学んだ。

56年4月28日に、36年ぶりに郡山グランドホテルで、卒業生436人の内95人が参加して同窓会が開催され、私も東京から駆けつけた。

やがて、安積新制中学校、安積高等学校と、昭和26年に卒業するまで6年間通学在籍したのである。

いま、私の手許には、黄ばんだホロボロの1冊の「サイン帖」がある。

これは安積高等学校卒業時に恩師や友人から「ひとこと」書いてもらった大切な青春の思い出の記録帖であり、私の小さな宝物でもある。

「ひとこと」を書き記してくれた先生方や友人は、いまどうしていただけるだろうか。文と文との間に当時の記憶がよみがえってきて、めがしらが熱くなり、心に湧きあがるある情感を感じ

られてくる。

1ページ目には墨痕もあざやかに栗原茂先生が「**最大多数の最大幸福**」と記して下さった。

そして2ページ目には教頭武知先生（愛称ヤッペ）の「**自強不息**」とある。

*（ ）内は、われわれ悪童連がおそれおおくも奉った当時の「ニックネーム」である。

さらに順不同に続けると……。

「**若き生命を日々創造されん事を**」

西洋史・竹花先生（ドライマン）。

「**天命を信じて人事を尽す**」日本史・

小池先生（ガンキツツアン）。

「**達観せよ**」人文地理・椎野先生（重箱）。

「**日又新**」数学・島影先生（トックリ）。

「**至誠**」数学・滝田先生（トメサン）。

「**誠実の苦惱**」数学・室根先生（ヤマアラン）。

「**運鈍根**」数学・稲田先生（カッポン）。

「**自主明朗、研究受理**」一般社会・渡辺（永）先生（ホラテン）。

「**敬天愛人**」時事問題・近藤先生（ナメクチ）。

「**ねこのひたいのような所に、世界の人々が集まっている。心は世界を見て理想をもって遅々と、あせんなさんな。20世紀後半は面白いぞ**」物理・中野先生。

そしてクラス担任でもあった国文の牧田治久先生（ゴレム）はこう記して下さった。

「ときどき、人は、馬車馬という罵倒をする。しかし、馬車馬は笑っているかもしれない。新しい新道みちを、馬車馬が馬車をひいて通っていったーと、というような人間をね。デコデコしたデコレーションに、ビクビクしてでんぐり返ってはいけない。たつた、道は1本なのだから。」

齢40路を過ぎた今の私、ジーンとくる青春の息吹きである。この他にももっともっご紹介したい「ことば」もあるが紙面も果きかけた。

最後に、親友の山口実君（現在日東紡仙台勤務）の「巻末に送る言葉」でしめくろう。

「え!! 別れるって?」

「誰と?」「俺と?」

「本当かい?」

「じゃ、道化芝居は終わったのですね」

「……………」

「おーい、幕をおろせい」

私の廻りには、みんないい人がいて、かつての散漫純粹、放蕩無頼の日のいちにちをよみがえらせてくれる故郷福島県と安積高等学校なのである。

（福島民友新聞に掲載された新年雑感より引用修正しました）

光陰矢の如く

58期 小浜精吾

わが58期は、太平洋戦争華やか?なりし時代に母校に通い、卒業時は終戦の年と云うめぐり合わせであった。まさに、運命のいたずらかも知れない。

戦後、仲間（58期）と東京にて久々に遇いはじめたのが、多分、昭和33年位、齢27～8才頃と記憶する。

各人が社会人となり、一息つき始め出した為でもあるが、何と云っても、当時の今は亡きわれ等が敬愛する『弁護士』の高橋俊郎君の存在が光っていたのである。彼は張り切って在京58期会の世話を精力的にしていたので、大都会で仲間を見つけ出すのに、そう時間はかからなかった。

自来、58期会は年に1～2回を目途に『懐旧談の集い』を催し、出席者は毎回15～6名と、盛況である。各人が『薄く』なったり、『白く』なったりではあるが、旧友の顔を見ることが出来るのも、偏に「安積あり」の感。

医療法人

有隣会南浦和病院

336 浦和市太田窪1973 ☎0488-85-5307

□理事長・病院長・医学博士 矢吹陸郎 (45期卒)